

エッセイ

本土在住の硫黄島民3世として 初の遺骨収集に参加して

羽切 朋子 (全国硫黄島島民3世の会 副会長)

「やはりこの地は戦地だったのか…」

初めて、ご遺骨を手にした時の、私の心の声…私の中で、硫黄島の戦前・戦中・戦後が繋がった瞬間でした。

2022年夏、硫黄島での遺骨収集に初めて参加してきました。参加したいと願ってから20年が経っていました。

祖母の兄たちは強制疎開の対象から外され、軍属として硫黄島に残り、そのまま硫黄島のどこかで亡くなったと聞いていました。遺骨収集が行われていることを知り、「祖母の兄たちを探したい！見つけることができるかも！」と思ったのが、20年前の小笠原村が主催するおがさわら丸での墓参中でした⁽¹⁾。

今まで何度も硫黄島に降り立ってきましたが、硫黄島にてご遺骨に触れる機会はなく、私の中では硫黄島＝“故郷”であり“お墓のある場所”という感覚で、どこかで「本当に、ご遺骨が未だにあるのだろうか？」と、墓参に参加するたびに思っていました。

「ありがとうございます。皆さまのおかげで、私たちは今を幸せに生きております！と笑顔でお迎える」…遺骨収集の先輩に受けたアドバイス

のひとつでしたが、どうしても笑顔になれなかった時がありました。

治療痕のない“きれいな歯”が出てきた時の、きっと若い方であろう歯が出てきた時のことでした。「どんな思いを、この方も、ご家族も、一緒に戦っていた方々も抱いたんだろう？」「約80年も一人で寂しくなかったのだろうか？」と胸が締め付けられ、笑顔ではなく涙となっていました。

“歯”は、私が祖母の兄たちを見つける手がかりとしていたからだと思います。祖母に「一番上の兄はオシャレで、虫歯でもないのに金を前歯にはめていたんだよ！」と聞いていたからです。出てきた歯は金をはめてはおらず、祖母の兄たちでは無かったと思うけれど、「見つけるんだ！」と強く思って参加した私には、祖母の兄たちに思えてしまったのだと、今は感じています。

実は私の初の遺骨収集は、このご時世の影響で、団の中でコロナ陽性の方が出てしまい、たったの4日間しか作業ができませんでした。とても悔しい思いで終わってしまいましたが、終わりではなく、はじまりだと思っています。沢山の、誰かの大切な方々が、硫黄島で待っています。祖母の兄たちも見つきたいですし、感謝も伝えたいからです。

戦地になる前、硫黄島はとても豊かな暮らしで

楽しい日々だったと祖母から聞いています。また、数日間硫黄島で過ごす事で実感もしました。そんな硫黄島が戻ってくる事も祈り、何度でも参加していきたいとも思っています。そうそう、内地に住む3世としては初の参加だったようです。

2023年夏、再び硫黄島へ向かい、ご遺骨を迎え入れてきました。本土が見えた時、私の隣に座るご遺骨に手を当て、「おかえりなさい、そしてありがとうございます」と、半泣きの笑顔で声をかけることができた時のことは、一生忘れられない時間です。時間が足りず迎え入れることが出来なかったご遺骨は、まだまだ沢山、約80年も待っています。必ず迎えに行こうと、まだまだはじまりだと思っています。

注

- (1) 「おがさわら丸での墓参」の正式名称は小笠原村硫黄島訪島事業。